

中学生の友人関係の変化の検討

- 学年差・性差、自己及び友人の相互理解に注目して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
花田 英美

本研究は、中学生を対象にして、「友人構成」「友人との付き合い方」「友人関係への意識」「自己及び友人理解感・理解欲求」「友人間の問題対処行動」の5つから構成された質問紙を用いて調査を行った。

研究 では、中学生全体の友人関係の基本的特徴を捉え、その上で学年差や性差について検討した。また、研究 では、自己と友人との間で理解しあっているか、理解したいと考えているかということ进行分析単位とし、相互理解感・相互理解欲求と友人関係の関連を検討した。

その結果、研究 では、中学生全体の特徴として、「友だち」で想起する友人数は多く、その中で、周囲との良好な関係維持のために努力している人が多いことがわかった。友人関係の学年差については、学年があがるにつれて、友人関係が特定化し、友人関係にわずらわしさを感じるが増えるという特徴がみられたが、中学校2年生時期にはそうした傾向と異なる傾向を示しており、この中学校2年生時期が3学年において「友だち」範疇の変化する時期であることが示された。

また、友人関係の性差については、男子よりも女子が、友人との関係性の維持に気をつけている様子が見え、相手の内面を理解したいという志向が顕著であった。しかし、性別ごとの学年の変化を検討したところ、友人との付き合い方や意識において、すべての時期において性差があるわけではないことも示された。

研究 では、中学生の友人関係を理解感と理解欲求という視点から捉え、お互いに理解し合っていると感じている人とそうでない人の特徴の違い、お互いにもっと理解し合いたいと考えている人とそうでない人の特徴の違いについて示した。相互理解感や相互理解欲求が高い場合のほうが、友人との関わりを望む傾向が強いことが示された。

青年期の始まりに位置づけられる中学生という時期において、高校・大学へと続く発達の単なる通過点のように捉えられることが多い。しかし、中学校の3年間の友人関係が、必ずしも次の段階へと単純につながっているわけではなく、各学年によって異なる特徴を持つことが本研究では示された。また、友人関係の個人内の変化だけでなく、個人間の関係、つまり相互理解感・相互理解欲求と友人関係の関連も示され、友人関係を捉える一つの視点として、「相互理解」という視点の有効性が示唆されたと考えられる。